

# 修験道にふれる 10

修験課 桑澤 俊宏

## 《修験道十二道具》 並びに十六道具》 金剛杖

金剛杖とは仏教で云う所の法界塔婆を表します。法事や葬儀等でよく見かける事の多い塔婆でありますが、塔婆の意味は善を積むと云う意味が込められています。塔婆の始まりは仏教を開いたお釈迦様の遺骨(舍利仏)を納めるお堂(五重塔・五輪塔)を簡略化したものであります。



五輪塔の形にも意味があり、この世を構成する、五大要素(地・水・火・風・空)を表しているのです。これら五大要素の根源が、仏様(大日如来)であると密教では考えるため、

塔婆とは仏様(大日如来)を表し、行者が用いる金剛杖もまた、大日如来を表すのです。金剛杖は歩行を助けるものであり、弱き者の助けとなる杖とされ、また悟りを求め修行に励む行者の支えとなる智慧の杖とも呼ばれているのです。即ち金剛杖とは、杖自体が仏様であり、また仏様の智慧であるとされ、行者を悟りへと導く支えの杖であるのです。

## 遠近の人や菩提の数積みみ 猶たのみある 正覚の場

《山伏の秘歌》  
「遠近の人や菩提の数積みみ 猶たのみある 正覚の場」  
奈良県にあります大峯山は宗派問わず山伏の聖地であり、その大峯山中を六根清浄と唱えながら行場を巡り、一步一步修行(菩提)を積み重ねて行きます。山伏が山中で修行すると云うことは、悟りを求め、無明煩惱を断ち切ることを目的とし、「正覚の場」(悟りの境地)を目指し歩を進めるのです。「たのみある 正覚の場」とは、大峯山で云う所の「小篠の根本道場」を指し、大峯山中において大切な場所であります。山伏が、山中(大峯山)に入ると云うことは、悟りの境地を意味する小篠の根本道場を目指し、一步一步修行を積み重ね、「正覚の場」を求め歩を進めるのです。

# 昨年の大雪の思い出

法務課 原 秀誠

平成二十六年二月十四日、ケープルカーが工事中であったため、リフトでお山に行く。

明日のお釈迦様の涅槃会の準備の為に泊まる事にした。日中に仏舎利塔に行き、お供物を乗せる台である三宝に、リングゴや野菜・干物をお供えして、周りの雪を掃除する。雪かきを何度もしたが、そばから雪が降り積もって、明日の涅槃会が心配であった。

法務室に寝ていたのであるが、夜中に屋根から雪が落ちて、すごい音がした。十五日、起きて外を見たらびっくりした。一メートル程、雪が積もっていた。

用度部の人達や堂守さん達がすでに、大本堂まで道を作ってくれた。



用度部の人達や堂守さん達により一人一人がようやく通れる道ができていた。

早速、被布のみで六時のお勤めをする。行者さん達も行場に行けず、一緒にお勤めし、彼らは雪かきが行になつてしまった。朝食の後、一服して雪かきをする。朝出勤する人達の為に、寺務所の前道を作る。作っても屋根の雪が落ちて、道が塞がって何遍も作り直す。しかし、その日はお山の職員は自宅待機となる。

御信徒の人誰も登つて来なかった。  
小生十五日の涅槃会のため、仏舎利を開けたり、書院の「竹の間」にて、涅槃図の供養を皆でする予定であったが、仏舎利は大雪の為に中止となるも、書院の法要は小生の導師にて行った。  
昼過ぎても雪は止みそうになく、夕方、用度部の人、しきりに法務室や書院の雪の様子を見に来ていた。その内に、書院の方が慌ただしくなり見に行くと、「松の間」の廊下のガラス戸が屋根から落ちた雪が迫って、

戸を押しガラス戸や経机が三、四脚メチャメチャとなる。青いシートをして、ポリバケツに雪を入れて書院の庭に運んでいるではないか。自分も雪の入ったポリバケツを配膳の水槽に入れ、お湯で溶かしてガラスを取り出すのだ。何杯も何杯も皆で運んだらうか。ガラス戸二枚分のガラスだったので大分たくさんあった。夕方五時前より八時頃まで、屋根の雪が漸く収まったので、止めることになった。

今回は用度部の課長自ら指揮を取り、よくやつたものだ。  
最後に、竹の間にある涅槃図も心配になったので、取り外す事にした。竹の間の廊下の雪も大分雪が溜まって来た為である。  
涅槃図は大きいので皆で、下より徐々に巻き取って、上の方は脚立に乗っている人が、掛けた箇所を外して巻き取った。お山の貴重な掛け軸であるので、皆丁寧に箱に納めるまで、気を付けた。足袋やスリッパはひどく濡れてしまった。書院の襖絵は少し破れたり、ブヨブヨになった物があるので全部外して、近くの洗面所の廊下に並べて置いた。夕食は八時以降になつてしまつたが、雪をかきだすことができ、皆安堵した様子であった。その後、皆で今日一日が無事に終わったことで乾杯した。ご苦労様でした。(平成二十六年五月発行「やまゆり」神奈川ふだん記七十八号より転載)